

自然と偉大な馬と子供たち



馬は古今東西武士や騎士のみが乗ることを許され、身分制度を浮き彫りにした唯一の動物である。人を乗せ、高く飛び、速く駆ける動物は馬以外には見当たらない。

馬は餌を与えてくれる人間になつくというわけではなく、自分を乗りこなし征服した人間、自分を理解してくれた人間に対してのみ、従順になる。

つまり、それだけ馬の精神は気高く、厳しい。だからこそ、騎乗する人間を成長させるのである。

ヨーロッパの騎馬民族、特に貴族は馬の厳しさを心から尊敬し、自分の子供に馬を通して帝王学を学ばせようと考えた。それが現代の馬術競技につながったのである。

馬術競技の要素がそれを物語る。

- 一、自分一人で自分と異なつた性格を持つ生き物との二人三脚で、自分自身と戦う。
- 一、男女の性別、大人・子供の年齢のハンディキャップを一切受け入れない、唯一のスポーツ競技。
- 一、常に百点満点を目指す減点方式の競技。
- 一、リカバリーの効かない、ただ一回だけのチャンス。

これは、先を見通す洞察力・判断力・決断力を養う要素にもなっている。

私はよく子供たちに「馬に蹴られないようにするにはどうしたらよいただろうか。」と聞いてみる。「馬が蹴っても馬の足が届かないところに

いればよい。」というのが、その答えだ。

普段は決して人間を蹴らないようなおとなしい馬であっても、何かの拍子に驚いて暴れることがある。当たり前なことだが、その時に馬の足が届かない所にいれば決して蹴られるようなことはない。

この『当たり前前のこと』が馬のすべての要素であり、すべての人々の人生そのものである。

「こうしたら、こうなる。」「ああすれば、こうなる。」という、先を予測できる落ち着いた人間になることを馬は要求して止まない。ここから自然に馬と子供の間ルールが生まれ、お互いのつながりを育みあつていく。

富士の裾野に広がる大自然の中で、尊厳を持った馬と接しながら、正しく成長しない子供などいないのである。

勉強も大切だ。しかし、それだけが生活のすべて、人生のすべてではないこともまた事実である。

コンピュータを使うことが現代人の常識となりつつある世の中で、子供がいわゆる『オタク』になっていくことは子供の責任ではない。私自身コンピュータでゲームをしてみたら、実に楽しい限りだった。

しかし、私の子供のころは、テレビゲームやコンピュータゲームなどあるわけもなかった。そのような中でも、自分たちで工夫をして遊びを考え出し、野原を駆け巡り、夜遅くまで友達といろいろなスポーツをして遊んだものだった。

自分の子供の明日のために、その良き時代を子供たちに返してあげるのは我々大人の責任ではないだろうか。

私は馬を通してそれができると考えている。